

前回にひきつづき、今回は、歯周病と全身疾患、誤炎性肺炎、骨粗しょう症についてお話します。

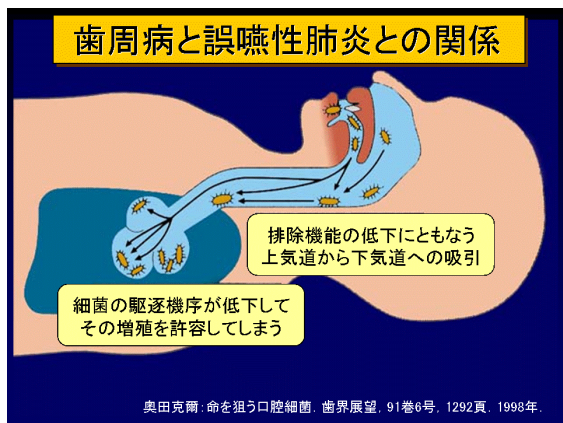
歯周病と誤炎性肺炎

肺や気管は嚥下反射、咳反射など身体が生理的に反応することによって、口のなかの細菌が侵入することから保護されています。

しかし、高齢になるとこれらの生理的機能が衰えるため、自らの唾液や消化管内容物を口腔内細菌といっしょに、誤嚥することが多くなります。免疫力の低下した高齢者ではこのことにより誤嚥下性肺炎を発症します。

この誤嚥性肺炎の原因となる細菌の多くが歯周病細菌であるといわれています。

高齢者が誤嚥性肺炎にかかると平均で約50日間入院し、約170万の医療費を必要とする報告もあります。



特に寝たきり状態の高齢者では、口腔と気管の位置がほぼ水平になるため、口腔内細菌が気管内に無意識のうちに誤嚥される可能性があります。

特別養護老人ホームの要介護高齢者におこなった口腔ケアによる肺炎予防効果についての研究によると、肺炎、肺炎による死亡、発熱日数は口腔ケアを行った群において有意に低下したと報告しています。

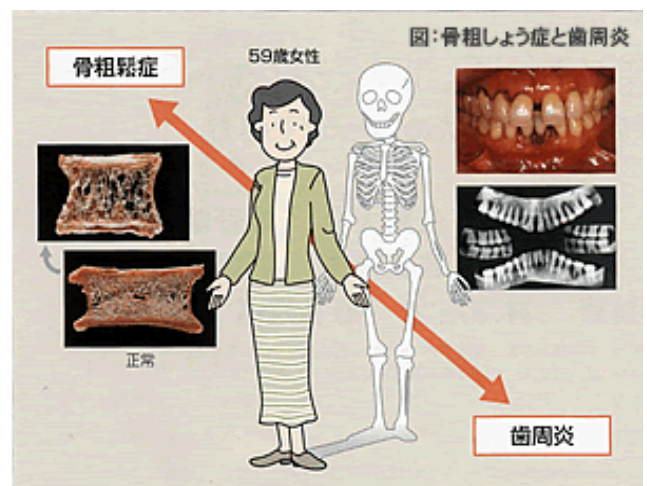
有歯顎者、無歯顎者における口腔ケアグループと対象グループの比較

	有歯顎者		無歯顎者	
	口腔ケアグループ	対象グループ	口腔ケアグループ	対象グループ
発熱発症者数	13(11%)	26(26%)**	14(18%)	28(34%)*
肺炎発症者数	10(9%)	21(21%)**	7(9%)	17(20%)
肺炎による死者数	7(6%)	20(20%)**	6(7%)	11(13%)

(* p<0.05, ** p<0.01)
有歯顎者においても、無歯顎者においても、口腔ケアグループのほうが、発熱者、肺炎発症者並びに死亡者が少なかった

歯周病と骨粗しょう症

骨粗しょう症は日常のライフスタイルが大きく影響する病気で、歯周病と同様に生活習慣病のひとつと考えられています。歯周炎が進行している人ほど骨粗しょう症の疑いが強いと診断される割合が高いという傾向があります。



全身の骨量の低下は口腔(顎骨)の骨量の喪失に影響していると考えられますが、口腔(顎骨)の骨量と歯周病のとの関連ははっきりしていません。しかし、いくつかの報告から閉経後女性の歯周病にかかっている患者さんからは、一般の方より骨粗しょう症の検出率が高く閉経後に発症した歯周炎の進行過程に影響を及ぼすことが考えられます。

歯周病の予防、治療はからだ全体の健康管理につながっているのです。